

明治における西洋文化の受容

—サミュエル・ジョンソンの場合—（その2）

早 川 勇

3. 明治日本の成立過程におけるジョンソンの受容

3.1 『西国立志編』のなかのジョンソン

辞書編纂においてジョンソンの辞書はほとんど利用されなかったが、『西国立志編』のなかでジョンソンは大いに活躍した。明治初期に絶大な影響力をもっていたこの啓蒙書のあり方と、そのなかでのジョンソンの扱われ方によって、明治年間のジョンソン像や彼の位置は決まったといえる。

明治の青年たちの愛読書は『西国立志編』と『学問のすゝめ』だった。前者は、下級武士出身の中村正直がスコットランド育ちのスマイルズ (Samuel Smiles) の *Self-Help: With Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance* (1867年改訂版) を翻訳したもので、明治3～4年に上梓された。木版刷り和装本の形で江湖に送られたが、明治10年には『改正西国立志編』の書名で活版洋装1冊本が刊行された。『西国立志編』は100万部売れたといわれている。徳川の幕藩体制崩壊によって没落した武士階層にとっても、この書は生きる希望だった。『学問のすゝめ』は第一篇が明治5年に世に出て、同9年に第十七篇が刊行された。発行部数は340万部といわれる。この二人の啓蒙思想家の違いを、北村透谷

は『女性雑誌』（明治26年4月）においてみごとに表現している。「福沢翁には吾人、「純然たる時代の驕兒」なる名称を呈するを憚らず。彼は旧世界に生まれながら、徹頭徹尾、旧世界を抛げたる人なり。彼は新世界に於て拡大なる領地を有すると雖、その指の一本すらも旧世界の中に置かざりしなり。彼は平穩ある大改革家なり、然れども彼の改革は寧ろ外部の改革にして、国民の理想を嚮導したるものにあらず。（中略）敬宇先生は改革家にあらず、適用家なり、静和なる保守家にして、然も泰西の文物を注入するに力を効せし人なり。彼の中には東西の文明が狭き意味に於て相調和しつゝあるなり。彼は儒教道教を其の末路に救ひたると共に、一方に於ては泰西の化育を適用したり。彼は其の儒教的支那思想を以てスマイルズの『自助論』を崇敬したり。彼に於ては正直なる採択あり。熱心なる事業はなし、温和なる崇敬はあり、執着なる崇拜はなし。」（『透谷全集 第二巻』岩波書店、p. 173）

中村は自助論第一編の序において、自分が理想とする国家や社会をこう描いている。「余曰く、子兵強ければすなわち國頼んでもつて治安というか。且つ西国の強きは兵によるというか。これ大いに然らず。その西国の強きは、人民篤く天道を信ずるによる。人民に自主の権あるによる。政寛に法公なるによる。（中略）けだし国は、人衆あい合うの称なり。故に人々の品行正しければ、すなわち風俗美なり。風俗美なれば、すなわち一国協和し、合して一体を成す。」（サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』講談社学術文庫、p. 39）このような理想を実現するために、中村は原著を訳したのである。ここには素朴な愛国心と健全な社会観や世界観が表れている。

『西国立志編』のなかには、ジョンソンが8回ほど登場する。以下に改訂版の *Self-Help* (Boston: Ticknor and Fields, 1866) とその日本語訳を示したい。なお、日本語訳は初版の原本によったので、原文の表記が

うまく反映されていない個所がある。

[1] The difference between men consists, in a great measure, in the intelligence of their observation. The Russian proverb says of the non-observant man, "He goes through the forest and sees no firewood." "The wise man's eyes are in his head," says Solomon, "but the fool walketh in darkness." "Sir," said Johnson, on one occasion, to a fine gentleman just returned from Italy, "some men will learn more in the Hampstead stage than others in the tour of Europe." (p. 98)

人ニ智愚大小ノ異アルハ、大抵ハソノ事物ヲ観察スルニ聡慧ナルト、聡慧ナラザルトニアリ。俄羅斯ノ諺ニ、「彼人ハ樹林中ニ行ケドモ、薪ヲ見ズ」ト云ルハ、観察スル事ヲ解セザル一種ノ人ヲ指シテ言ヘルモノナリ。所羅門（往古以色列ノ賢王ノ名）曰ク、智者ノ眼目ハ、ソノ頭ノ中ニ在リ、愚人ハ黒暗ノ中ニ行歩スト云ヘリ。学士戎孫嘗ヲ新タニ意大利ヨリ帰レル人ニ向ツテ、「人或ハコ舍伯斯の徳ト在リテ、他人ノ歐羅巴ヲ巡遊スルモノヨリ却ツテ多ク学ビ知レルモノアリ」ト云ヘリ。（第五編四）[管見の限りでは、このジョンソンのことばが、その後引用されたことはない。]

[2] This art of seizing opportunities and turning even accidents to account, bending them to some purpose, is a great secret of success. Dr. Johnson has defined genius to be "a mind of large general powers accidentally determined in some particular direction." Men who are resolved to find a way for themselves will always find opportunities enough ; and if they do not lie ready to their hand, they will make them. (p. 102)

上ニ云ヘルモノ、如ク機会ヲ拏着シ、偶然ノ事ヲ実益ニ転ズル事ハ、成効ヲ得ベキ大秘事ナリ。学士戎孫ハ、人ノ英才ハ偶然一方ニ向キタル大

勢力ノ心ナリト云ヘリ。凡ヲ人自^{ミズカラ スル}ラ為トコロアラント欲シ、心意ヲ注^{ソ、ガ}バ、必ズ機会ヲ看出スベシ。若シ看出サザレバ、自^マラ^サ機^シ会^ノヲ造^ルり出^ス事^ヲ得^ルベシ。(第五編十一) [「天才」の定義が引用されることはほとんどなかった。むしろ、次に続くスマイルズのことばが、ジョンソンのことばのように紹介されたりした。]

[3] There is a Russian proverb which says that Misfortune is next door to Stupidity ; and it will often be found that men who are constantly lamenting their luck are in some way or other reaping the consequences of their own neglect, mismanagement, improvidence, or want of application. Dr. Johnson, who came up to London with a single guinea in his pocket, and who once accurately described himself in his signature to a letter addressed to a noble lord as *Impransus*, or Dinnerless, has honestly said, "All the complaints which are made of the world are unjust ; I never knew a man of merit neglected ; it was generally by his own fault that he failed of success." (pp. 257-8)

ラッシアン
俄羅斯人ノ諺ニ、薄命ハ愚蠢ニ次ケル門戸ナリト云ヘルハ、最モ理ノ勝
レルヲ覺ユ。蓋シ人ノ常ニ不幸ヲ嘆スル者ヲ觀ルニ、或ハ怠忽ニヨリ、
或ハ弁理ノ失過アルニ由リ、或ハ後來ノ防慮ナキニ由リ、或ハ學習ノ功
ヲ欠クニ由テ、薄福ノ果実ヲ刈リタルナリ。学士^{ジョンソン}戎孫^{ロンドン}、倫敦ニ来リシ時、
ソノ衣袋^{ポツケツト}中ニ、タダー箇^{キニ}ノ奇尼(金銭ノ名)アルノミ。カクマデ貧困ナ
ル事アリシガ、ソノ言ニ曰ク、「世上ノ人、不平ヲ鳴ラシ怨言ヲ吐クモ
ノハ、皆ナ公正ニ非ズ、我未ダ功劳アル人ノ、一世ニ遺棄セラル、ヲ見
タル事ナシ。凡ソ事ヲ為スニ、利達得ズシテ敗績スルモノハ、ミナソノ
人ノ過去ニシテ自ラ取レルモノナリ」ト云ヘリ。(第九編十一) [この
ことばは、修身の教科書などでたびたび引用された。]

[4] Dr. Johnson held that early debt is ruin. His words on the subject

are weighty, and worthy of being held in remembrance. "Do not," said he, "accustom yourself to consider debt only as an inconvenience ; you will find it a calamity. Poverty takes away so many means of doing good, and produces so much inability to resist evil, both natural and moral, that it is by all virtuous means to be avoided... Let it be your first care, then, not to be in any man's debt. Resolve not to be poor ; whatever you have, spend less. Poverty is a great enemy to human happiness ; it certainly destroys liberty, and it makes some virtues impracticable and others extremely difficult. Frugality is not only the basis of quiet, but of beneficence. No man can help others that wants help himself ; we must have enough before we have to spare." (p. 288)

学士^{ジョンソン} 戎孫 (Dr. Johnson) 嘗テ人ヲ規戒シテ曰ク、汝借債ヲ不便ナルモノトノミ思フベカラズ。借債ハ人生ノ災難ナリ。故ニ汝必ズ人ヨリ金ヲ借ルマジト、志ヲ立ツベシ。抑モ儉約ハ、^{シヤクザイ}安静ノ基礎ナルノミナラズ。マタ仁恵ノ根源ナリ。自ヲ助クル能ハザルモノハ、他人ヲ助クベキヤウナシト云ヘリ。(第十編十) [かなりの部分を翻訳していない。この部分は借金をするなという警句としてしばしば利用された。]

[5] Sir Walter Scott used to say that "of all vices drinking is the most incompatible with greatness." Not only so, but it is incompatible with economy, decency, health, and honest living. When a youth cannot restrain, he must abstain. Dr. Johnson's case is the case of many. He said, referring to his own habits, "Sir, I can abstain ; but I can't be moderate." But to wrestle vigorously and successfully with any vicious habit, we must not merely be satisfied with contending on the low ground of worldly prudence, though that is of use, but take stand upon a higher moral elevation. (p. 295)

スコット
斯格的曰ク、種々悪習ノ中、飲酒ノ一事、最モ高大ノ事業ヲ妨グトイヘリ。吾オモフニ、独り此ノミナラズ、節儉ヲ妨ゲ、礼義ヲ賊ヒ、身体ヲ傷リ、老實（マジメ）ノ生計ヲ妨グルナリ。少年ノ人モシ節飲スル能ハザレバ、禁戒シテ飲ム事ナカレ。学士^{ジョンソン}戎孫ハ我能ク酒ヲ止ムレドモ節飲スル事能ハズト云ヘリ。（第十編十六）〔飲酒に限らず、人間の性として節度を保てないことを取り上げた作家も多い。〕

[6] Want of confidence is perhaps a greater obstacle to improvement than is generally imagined. It has been said that half the failure in life arise from pulling in one's horse while he is leaping. Dr. Johnson was accustomed to attribute his success to confidence in his own powers. True modesty is quite compatible with a due estimate of one's own merits, and does not demand the abnegation of all merit. (p. 321)

サレバ、昔シヨリ人ノ言ヒ慣ハシタル語ニ、人生ノ失敗（シソコナヒ）、ソノ一半ハ、馬ノ自ラ能ク^{カケ}跑行クモノヲ、妄リ控（ヒク）引スルガ如キコトニ由リ起ルト云ヘリ。学士^{ジョンソン}戎孫マタ「常ニソノ業ヲ成シタル事ハ、我が自己ノ勢力ヲ信ゼシニ由レリ」ト言ヘリ。真正ノ謙退ハ、自己ニ存スル価値ヲ、全ク無モノト為ルニ非ズ。（第十一編十三）〔このことはもそれほど利用されていない。〕

[7] There is usually no want of desire on the part of most persons to arrive at the results of self-culture, but there is a great aversion to pay the inevitable price for it, of hard work. Dr. Johnson held that "impatience of study was the mental disease of the present generation;" and the remark is still applicable. We may not believe that there is a royal road to learning, but we seem to believe very firmly in a "popular" one. (p. 322)

人多ク学業ノ成就スル事ヲ想願スレドモ、コレヲ得ルタメノ^{アタヒ}価銀ヲ出ス

事ヲ嫌フナリ。即チ勞苦シテ工夫ヲ用フルヲ嫌フ事ナリ。學習^レ事^ニ耐ザレハ、當世人心^ノ病ナリト、コノ言今日ニモ、ナホ用フベシ。(第十一編十四) [翻訳していない部分がある。このことばもそれほど利用されなかった。]

[8] Even happiness itself may become habitual. There is a habit of looking at the bright side of things, and also of looking at the dark side. Dr. Johnson has said that the habit of looking at the best side of a thing is worth more to a man than a thousand pounds a year. And we possess the power, to a great extent, of so exercising the will as to direct the thoughts upon objects calculated to yield happiness and improvement rather than their opposites. In this way the habit of happy thought may be made to spring up like any other habit. And to bring up men or women with a genial nature of this sort, a good temper, and a happy frame of mind, is perhaps of even more importance, in many cases, than to perfect them in much knowledge and many accomplishments. (pp. 405-6)

習慣ノ、品行ヲ造り出ス事ハ、言フモサラナリ。人生ノ福祉ト雖ドモ、亦習慣ニ由リテ得ラルベシ。凡ソ天下ノ事物、一方ハ明カニ、一方ハ暗シ。故ニ人マタ二種アリ。常ニ明カナル一辺ヲ見ル^{ナラヘ}ニ慣ルモノアリ。マタ暗キ一辺ヲ看ルニ慣ルモノアリ。蓋シ日夜吾ガ耳目ニ接スルモノ、善悪吉凶美醜アリ。吾ガ心志ニ感ズルモノ。喜怒哀楽愛憎アリ。然ルニ一種ノ人ハ、常ニ善ナル、吉ナル、美ナル一辺ヲ見ルニ慣レ、喜ビ樂ミ愛スル情ヲ起ス^{ナラ}ニ慣ヘリ。同ジキ遭際(シアハセ)ニ会シ、同ジキ命運ヲ受クト雖ドモ、人心ノ習慣ニ由テ、コノ二種ノ異アリ。即チ禍福^{タガヒ}ノ差アル事ナリ。学士^{ジョンソン}戎孫^{ヨキ}曰ク、常ニ物ノ善一辺ヲ見ル^{ナラヘ}ニ慣ル人ハ、一年^{ポンド}一千金ノ贖産アル人ヨリ富メリト。(第十三編十四) [この話は、その後

ほとんど利用されなかった。]

この日英語の引用文の対比によって、次の3点が明らかになった。

① 『西国立志編』は、これからの修身や道徳の書として扱われた。スマイルズは原著において、自立は人間が人間として存在するための勤めだとし、世俗的な成功それ自体が重要なのではなく、人間としての品性(character)の向上こそが目的だとした。そして、このような自助の精神こそが人類の進歩を達成する一歩だと考えた。彼の読者は、産業が勃興する社会に新しく抬頭してきた労働者たちである。この考えは、イングランドよりもスコットランドやアメリカにおいて広く受け入れられた。このことは、明治初期の英和辞典の編纂において、スコットランドの辞書編纂家オウグルビーの辞書が利用されたことと完全に一致する。中村正直もこの考えを彼なりに理解したにちがいない。しかし、彼は原著にある産業や技術に関する記述にはほとんど関心を示さず、もっぱら自立し出世した人物やその生き方を中心に取り上げた。

明治5年の学制発布にともない、近代的な学校制度が生まれようとするなかでこの書が教科書として利用された。明治8年の『文部省第三年報・第一冊』の巻末に「小学書籍一覧表」がある。そのなかに修身教科書として『西国立志編』が掲げられている。ただし、ここでの「修身」とは、実学尊重の新たなる道徳教育という意味合いである。中村は東西の文明を比較し、儒教思想と西洋の思想を比較対照し、その共通性を探求したといえる。この本は、天皇の進講にも使われ、明治日本における近代的学問および教育の最良の教科書とみなされた。このような意図もあり、中村の翻訳の文体は基本的に漢文訓読調となっているものの、ルビや時には説明を追加したりして、理解しやすくなるように心がけている。それでも、かなり読みづらい。

② 『西国立志編』においては、西洋の概念が東洋的に儒教的に理解さ

れた。この書はもともと凋落士族層に精神的支えを与えるために執筆されたため、漢語が多用されている。このため、必然的に、西洋の概念は漢語を通じて理解された。この点を考える参考になるので、関連する漢語とそれに対応する英語を以下に列挙したい。art 大秘事、character 品行、chastity 貞正、civilization 昌運、comfort 便利、conscience 良心、courage 剛毅、culture 培養、decency 礼儀、diligence 勤勉、economy 節約、節儉、goodness 善良ノ徳、independence 自主、modesty 謙退、morality 善ク人倫ニ交ハル、perseverance 恒久ニ耐エ、久シキニ耐エ、responsibility 職任、self-discipline 自ヲ教習、self-respect 自ラ恭敬スル事、truthfulness 真実、virtue 衆徳 などである。

西洋の概念を理解するに際して、このように漢語を多用したことは、それらの概念の理解に影響を与えている可能性が高い。「西洋の自由・権利の観念が儒教、とくに朱子学の理論を媒介として受入れられたという事情である。「天賦人權」とか「性法」という観念は、人間性（人間ネイチャーの自然）に本来道徳性が賦与されており、この道徳的本性が、一方では五倫五常という社会秩序の根本規範に、他方では宇宙自然の秩序に連続しているとする朱子学の理論を除外しては考えられない。」（植手通有 1974、p. 116）

この書は出版当初から、一般の人々には次のように思われていたようで、第九編の自序で中村はこう反論している。「あるひとは、また曰く、この書の説くところ、孔子の旨いに合う。故ゆえに取るべし、と。（中略）孔子をして今日こんにちに生まれしめば、すなわちその務つとめて親見異説しんけんいせつを聴納ちやうのうすること、果たしていかんぞや。もし孔子の書を死読しどくし、留滞りゅうたいして化せず、ここをもつて天下の事理じを規ただし、一言いちごん合わざれば、駭おどろきてもつて怪かいとなす。かくのごとくなれば、すなわち孔子の学がくを好み及およばざるがごときの意いと、正まさにあい反す。」（講談社本、p. 325）中村は、西洋の富強は国民

の自助力と品行の高さによると想定し、その根源にはキリスト教の「敬天愛人」の精神があると考えた。そして、その精神は儒教精神にも通ずるものがあると理解したことは事実であろう。

③ この書に8回余り登場するジョンソンについては、その文学や業績よりもむしろ彼の金言や格言が中心的に取り上げられ、それが明治の人々に知られるようになった。中村は、本来の書名であるべき「自助論」を採用することなく、『西国立志編』とした。このことは、この著作の性格を明瞭に物語っている。スマイルズの著作は、教養面で劣っていたスコットランドの市民に自立の精神を伝えようとするものであった。そのなかで、その書に登場するジョンソンは、その真の姿を伝えるものとはなっていない。ジョンソンの語ったことばが前後の脈絡なく都合のいいようにちりばめられているにすぎない。

中村正直には『西洋品行論』（十二冊、明治11～13年）という著作もある^(注1)。これもスマイルズの著作（*Character*, 1876）を種本として翻訳したものである。原著は12章よりなるが、中村は和本で各章をそれぞれ1冊にして刊行した。この著作においても10か所以上にわたってジョンソンへの言及が見られる。「デメースト及び潤孫ノ感化ヲ受シ事」（第二編、26丁）と題する個所では、ジョンソンが母の葬儀費のために『ラセラス』を書いたという逸話が紹介されている。また、第六編では次のように記されている。「ジョンソン学士潤孫曰ク「人ノ性気ニ気楽多キアリ、憂忿多キアリ、コレ自然ニモ由ルベケレドモ、大ニ其人ノ心志ト習慣トニ由テ何ノ方ニテ趣向スルナリ」ト」（7丁）「ジョンソン潤孫曰ク「人生ノ遭際ハ、シアハセ吉凶善悪、相ヒ表裏シタルモノナリ、若シアツテ吉ト善トノ一辺ニ着眼スル習ヒ、之ヲ以テ、ソノ性情ヲ安慰スレバ、コノ人ヤ、一年千金ノ産ヲモツ有スルヨリ勝レリ」トコノ言ハ、決シテ過甚ニ非ルナリ。」（8丁）

カラクトルエキザンプル ウラルク カレヂ セルフコントロール デューティ トルース マン子ル アート ブックス
品行、儀範、労苦、剛勇、自治、職分、真実、儀容、技巧、書籍、な

どのことばに象徴されるように、この書の道徳的目的は明白である。『西国立志編』も同じ意図で編纂されたことがわかる。

さらに、中村正直の手になる『西洋節用論』（明治19年）も同趣旨のものである。これも、スマイルズの *Thrift* (London : John Murray, 1875) を翻訳したものである。原本にジョンソンは5回あまり登場するが、翻訳書では2回現れる。その個所を英文とともに示したい。かなりの抄訳となっているが、その日本語は以前よりも読みやすい。

[1] "Poverty," he said, "takes away so many means of doing good, and produces so much inability to resist evil, both natural and moral, that it is by all virtuous means to be avoided. Resolve, then, not to be poor ; whatever you have, spend less. Frugality is not only the basis of quiet, but of beneficence. No man can help others who wants help himself : we must have enough before we have to spare"

And again he said, "Poverty is a great enemy to human happiness. It certainly destroys liberty, and it makes some virtues impracticable, and others extremely difficult. ... And to whom want is terrible, upon whatever principle, ought to think themselves obliged to learn the sage maxims of our parsimonious ancestors, and attain the salutary arts of contracting expense ; for without economy none can be rich, and with it few can be poor." (p. 20)

ジョンソン曰ク、貧ハ、人ヲシテ善ヲ行フ方法ヲ失ヒ悪ニ抵抗スル能ハザラシム、故ニ貧ハ務メテ避けザルベカラズ。儉ハ、安静ノ基礎タルノミナラズ、亦仁善ノ基礎ナリ。自ヲ助ル能ハザル者ハ、他人ヲ助クルヲ得ベケニヤ。自ヲ足ルハ先ナリ、貯存スルハ後ナリ。／又曰ク、貧ハ、人生福祉ノ大敵ナリ。自由ヲ破棄スルナリ。善徳モ貧ノ為ニ行ヒ難キヲ致ス。蓋シ貧ホド怖ルベキモノ無シ。宜ク祖先ノ節儉ヲ尚ブノ、金言ヲ

守り、費用ヲ省ク良法ヲ行フベシ。之ヲ能スレバ、貧シキヲ免カルベク、之ヲ能セザレバ富豈ニ獲ベケンヤ。(pp. 48-9)

[2] Johnson might well call Economy the mother of Liberty. No man can be free who is in debt. The inevitable effect of debt is not only to injure personal independence, but, in the long run, to inflict moral degradation. The debtor is exposed to constant humiliations. Men of honourable principles must be disgusted by borrowing money from persons to whom they cannot pay it back. (pp. 247-8)

ジョンソンハ、[エコノミイ]「節儉」ヲ目シテ [リベリテイ]「自由ノ母」ト云ヘリ。蓋シ負債アル人ハ、自由ナル能ハズ。且ツ德行へ疵ヲ付ルナリ。正経ナル人ハ、他人ノ金ヲ借りテ酒ヲ飲ミ衣服ヲ着シ外面ヲ飾ルヲ深ク嫌フコトナリ。(pp. 140-1)

このような道徳的取り上げ方は、明治時代の常套手段である。子供向けの『修身児訓』（巻之二、亀谷行、明治13年）には、孔子や佐藤一斎やスマイルズのことばと並んで次の金言が掲載されている。「^{ジョンソン}戒孫曰く、儉約を、安静の基礎たるのみならず、又仁恵の根源たり。」(12丁)

『西国立志編』が広く読まれ利用されたのは、ほぼ明治15年ころまでである。その間に教科書としても幅広く利用された。この時期の関連する出版物で注目すべきものが二つある。一つは、明治5年に京都で上演された『^{くつなおいわらべきょうがく}鞋補童教学』である。これは、『西国立志編』を典拠とした翻訳劇である。仮名垣魯文などの偽作の文体を模しているのは、この時代の特徴である。翌年には3巻本でも出版された。もう一つは、中邨秋香^{わげ}和解『仮名読 改正西洋立志編』（3編、明治15年）である。中村正直の手になる漢文訓読調の文章を「童蒙婦女」にもわかるように「通俗卑近の文体」、すなわち和文の口語調に書き換えたものである。また、和語によるルビを多く付した。冒頭は次のようになっている。「人は自らを^{ひと みづか}

助けて自らを立つべし／天は自ら其己れを助くる人を助くと云へる諺にまさしく実地に経験したる。」これによって『西国立志編』はより広く一般庶民にまで広まったのであろう。

『西国立志編』は明治20年前後に数種の異版が現れ、そのピークを迎え、20年代の半ばには過去のものとなってしまった。ところが、明治の40年ころ再度復活する。内村鑑三の門下生であった畔上賢造は明治39年に『自助論』の書名で改訂版を出した。彼は中村の翻訳を称賛しながらも、前書きでこう述べている。「先生の文今に於て之を読む稍漢文調に偏して、現代青年の甚だ了解に苦む（中略）先生の訳文は、原文の意を略したる所甚だ多きを以て、吾人は甚だ之を遺憾とし、別に新に『自助論』を今日の時文に翻訳して解説に易からしめ、且つ先生の略せられたる所を補はんとす。」畔上は早稲田大学を卒業し、ミルトンやカーライルやブラウニングを積極的に翻訳紹介した人物である。さらに、明治45年には山縣悌三郎の手になる新訳『自助論』も上梓された。しかしながら、中村のキリスト教精神に基づく自助の精神の確立という当初の意図は歪められ、努力や勤勉によって立身出世したというお話の連続となってしまった感がある。

明治維新の三大改革（地租改正、徴兵制、学制）が実施された。これらの急激な変革に対して民衆は激しく抵抗した。明治6年には、一揆や騒動の件数が前年に比べ倍増した。明治政府は、こうした民衆の動きと不平士族が結びつくことを強く警戒した。この動きを抑えつつ、政府は欧化政策をより一層促進しようとした。そして、鹿鳴館の時代となる。このような政治状況下で、一般大衆は西洋文明の真髄を咀嚼したいと考え、読書欲も旺盛となり、『西国立志編』などの西洋紹介本が大いに読まれた。同時に、女子教育も叫ばれ、明治7年に東京女子師範学区が設立され、中村正直が初代校長に就任した。皇后隣席のもと開校式が挙行

された。中村はまた東京大学文学部教授も兼ね、貴族院議員にも任命された。彼は一貫して道義や品行を根底にそえた近代文明の社会を構築したいと考え、富国強兵やアジア進出を目論む明治政府の一部勢力を批判した。ところが、この勢力が力を盛り返したため、明治13年6月、彼は女子師範学校校長の座から引きずり降ろされた。

ここで教育制度にも大きな変更がなされた。明治13年の改正教育令、明治14年の小学校校則綱領には、これまでの欧米中心の道徳を改め、日本あるいは東洋の「仁義忠孝の教」を中心とする道徳を基本とすることが明記された。これに伴い、『西国立志編』は教科書としての地位を失うこととなった。その後、中村は文部大臣の委嘱によって「徳育大意」の作成にあたった。しかし、「国ノ強弱ハ人民ノ品行ニ係ルコトナレバ」と主張する彼の草案は、総理大臣であった山県有朋や法制局長官井上毅によって批判され廃案となった。このような政治的意図のもと、明治23年10月に「教育勅語」が發布された。

3.2 初等教育に組み込まれたジョンソン

総じて述べるならば、明治の人々は『学問のすゝめ』やスマイルズ『西国立志編』やカーライル『英雄伝』などから西洋文化について学び、そこで出会う文豪や偉人の作品を読み広げ、そのなかで西洋の文化や文学やその精神についてより深く考察していった。

スマイルズの『セルフ・ヘルプ』（自助論）は、中村正直によって『西国立志編』へと多少の改変を余儀なくされた。時代の要請は中村の意図を歪曲させながら、立身出世や偉人伝の方向にどんどん進む。『東洋立志編』（明治14年）『女子立志編』（明治16年）『日本立志編』（明治27年）や『ナポレオン』などの伝記が陸続と刊行された。これによって、スマイルズの主張した「自助の精神」は正しく理解されることはあまりなかつ

た。しかし、明治の末年ころに中村の訳を改めようとする動きや、中村訳の漢語すべてにルビを振った版が刊行され、スマイルズの正しい理解を目指そうとする動きが多少現れたように思われる。

日本におけるジョンソンを考えるうえで見逃してはならない書がある。『西国童子鏡』（二冊）で、中村正直が翻訳し明治6年に出版したものである。西洋の偉人たちの伝記を簡単にまとめた子供向けの本である。John G. Edgar: *The Boyhood of Great Men, Intended as an Example to Youth* (1854) の1872年版を利用して、中村が翻訳した。この本の巻之三に「評論家」として学士潤孫が顔を出す。和本で8丁にも及ぶ伝記で、ジョンソンの略伝としては十分な長さである。これがジョンソンの本格的な紹介として日本における嚆矢となるのは驚きである。「^{ジョンソン}潤孫ハ、童子及ビ少年ノ日月ヲ艱難困苦ノ中ニ送り、忍ビガタキ者ヲ忍ビ、勝ガタキ者ニ勝チ」「^{ジョンソン}潤孫ハ猜忌独立ノ精神、憤怒勇往ノ氣象アリ」ただし、ジョンソンが天性怠惰であったことも記している。この書には、『西国立志編』における中村の基本姿勢の一面も見られる。

この流れにあるもう一つの書物を紹介しよう。子供向けの『泰西名家幼伝』（上下、明治13年）である。政治家の尾崎行雄が、上記エドガーの著作を翻訳したものである。原本では41名の偉人が出てくるが、尾崎が訳した本では24名となっている。記述もかなり簡略化されている。そのうちの一人がドクトル・ジョンソンである。話は幼少期が中心で、広範囲に読まれたかもしれない。尾崎は慶応義塾で学び、明治12年に福沢諭吉の推薦で『新潟新聞』の主筆となった。同15年には、『郵便報知新聞』の論説記者となり、立憲改進黨の結成にも参加した。23年に第1回の総選挙において立候補し当選を果たし、明治31年には第一次大隈重信内閣では文部大臣に就任した。

少しあとの時代になるが、ジョンソンは何と修身の教科書に登場する。

『尋常小学 修身口授教案卷四上』（明治20～21年）には50人もの偉人の教訓的なお話が掲載されている。ほとんどが日本人であるが、5人が外国人で、その一人がジョンソンである。その取り上げ方が興味深い。「世の人不仕合を嘆きて、世を怨み不平を言ふは、公正といひがたし、功勞ある人は世に棄てらるゝものに非ず、凡そ事をなして失敗するものは、其人過失ありて、自ら取れる禍なり」という彼のことばを利用している。

当時盛んに読まれた西洋偉人の立身伝の一例として『英米五傑 伝記物語』（篠田昌武、明治28年）を挙げたい。これはナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の著作（*Biographical Stories for Children* 1842）を翻訳したものであるが、五傑のなかにジョンソンが含まれる。彼についてのお話（pp. 46-63）は、誕生し病気を治すために女王の手に触れたことから始まる。書籍商として苦勞した父を蔑んでいた若き日のジョンソンについて詳しく述べる。そして、彼が大成したあと、父が本を売っていた市場を訪れる悔恨の姿を描く。「我が親愛なる小兒等よ、若し汝等が不忠不幸なることをなせしときには、直にサムエル、ジョンソンの懺悔せしことを思ひ起せよ。」のことばで終わる。ホーソーンの本は英語教科書として広く利用されていた。この物語は、明治39年にも吉田潔によって訳注が施され、『伝記物語』として出版された。これには縦書きの日本語訳と下には横書きで英文における難解な語句の説明がついていて、教科書の虎の巻であった。また、明治40年には、松川溪南訳『五偉人の少時』が世に出た。ここでは最後のことばは次のように訳されている。「お前方も、、、若し自分を愛する人の心を傷ましめたやうな場合には、サミュエル、ジョンソンの罰を思ひ出すが宜しい。」（p. 112）

『今人古人』（中里介山、明治39年）という変わった構成の本もある。欧米の詩人を取り上げるが、「人格の詩人」「不遇の詩人」といった分類分けをしている。そのなかで、ジョンソンが何度か現れる。「人中の王」

「傲岸不屈」「一日が全生涯を包含する生活」「ジョンソンの妻」のサブタイトルのもと紹介される。「貧苦艱難と健闘して人格の光を失はざりしものサムエル、ジョンソンのごときは少なからむ。」「げに恋は思案の他也。サムエル、ジョンソンは二十七歳の壯麗を以て四十八歳の寡婦に恋着して之と婚を結びたり。」また、読売新聞記者であった田村逆水の『人生と健闘』（明治41年）は、健闘の人物の一人として「健闘の文豪 ジョンソン」を取り上げている。7頁にわたって、貧困に苦しんだ少年・青年時代を中心に、ロンドンに移り住んでからの作家としての赤貧生活を簡略に述べる。「倫敦に次いで、サヴェージ伝を編み、人間志望の虚栄を歌ひ、ランブラアを刊行し。大辞典を完成し。アイドラーを発行し。五十一歳にして一大の傑作ラセラス伝を著はせり。」(p. 160) 最後は当然のことながら、教訓的なことばで結ばれる。「曰く任侠。曰く剛毅。曰く膽勇。曰く仁慈。是れ彼の歴史をして異彩あらしむる所以、十八世紀の巨人として仰がれたるサミュエル、ジョンソンは、正に之等の素質に由つて作られる人!!」(p. 162)

この流れは、一部の人たちを除いて、一般読者のあいだでは少なくとも明治の末年まで続く。子供向けの修身叢書の一冊として出版された『青年立志編』（永田岳淵、明治42年）には、第六章 (pp. 68-76) でジョンソンが取り上げられている。そこにはこんなことがば添えられている。「一を聞いて十を知る／恥を忍んで大成を期す／人足よりも情けなき作家」「母の葬儀費にラセラス伝を書く」とある。同種のものはいくつもある。『お伽教訓』（御伽研究会、明治44年）は、「王子ラセラス」(pp. 144-166) をお伽話として書き換えたものである。「むかしむかしアフリカのアビシニヤといふ国に極楽谷と云う所がありました。」で始まる。最後は教訓で締めくくられる。「さうして王子は世の中を見て、人の行くべき道を悟りました。で早速アビシニヤへ帰りました。王子はよい

はうりつ つく、よ まつりこと し わうちよ ちよがくこう た ちよし けういく
法律を作り、よい政治を布きました。王女は女学校を立て、女子を教育
しました。それから此の極楽谷は怠け者のない、活々とした本当の極楽谷
になりましたとさ、めでたしめでたし。」全体としてとてもうまく書き
換えているが、本来の『ラセラス』の趣意からほど遠いものとなっている。

3.3 教科書として利用されたジョンソンの『ラセラス』

明治10年代には、一種の翻訳小説ブームが興った。この時期の翻訳は、むしろ翻案と呼ぶべきかもしれない。江戸以来の文学やそのスタイルに慣れている読者に合わせる形で自由に翻訳された。この形態は、文明開化以前の日本においては西洋の文化のみならず文学においても一般的な受容の様式であったといえる。日本で最初に翻訳された西洋小説は、リットン (Earl of Lytton) が著わした恋愛小説 *Earnest Maltravers* とその続編 *Alice* を翻訳した『欧州奇事 花柳春話』(五冊、織田純一郎訳、明治11~12年)である。これが大ヒットし、リットンと同時代のイギリスの小説家ディズレーリ (Benjamin Disraeli) の小説が次々に翻訳された。また、この流れに新進気鋭の坪内逍遙も参入し、スコット『春風情話』(明治12年)などを翻訳した。

なぜ、政治小説が翻訳されたかという疑問に対して、自由民権運動の高まりと関係があるという説もある。この流れとは明らかに一線を画すように、ジョンソンの『ラセラス』もいろいろな訳者によって翻訳された。『ラセラス』が英語教育のなかに組み込まれていたことが、両者の大きな差の一因であろう。このため、この書の翻訳の基本スタイルは逐語訳であったり直訳であったりした。ただし、このスタイルと軌を一にするのは、森田思軒が明治21年に提唱した忠実な逐語訳である。

サマーズ (James Summers 1828-1901) は、明治6年から開成学校に

において英文学を講義した。シェイクスピアやミルトンはもちろんのこと、マコーレーの著作を利用し、ジョンソンについてもボズウェルの伝記を紹介した。Thomas B. Macaulay: *Essay on Boswell's Life of Johnson* (1831) である。明治15年ころまで、東京大学の一部学生以外にはジョンソンの実像は知られていなかったかもしれない。いいかえると、ジョンソンは『西国立志編』のなかのジョンソン像でしかなかった。ただし、次の著作は短いがかなり客観的に7頁にわたりジョンソンを紹介している。関吉孝訳『各国 英智史略』（二編二冊のうち上）は、明治6年の出版である。リッチフィールドの書籍商の子として生まれたという文ではじまる一般的な紹介文であるが、初期のものとしては注目したい。

その後、ジョンソンの『ラセラス』は、教科書として利用されるようになった。川戸道昭 (1997b, p. 4) によると、ホートン (William Houghton) が、明治12年9月から東京大学の理学部学生に『ラセラス』をテキストとして英語を教えている。このお雇い教師は、翌年の授業で次の書をテキストとした。*Johnson. Select Works. Edited, with introduction and notes, by Alfred Milnes. Lives of Dryden and Pope, and Rasselas.* (1879) これは455頁のかなり分厚い本である。全部を読んだとは考えられない。その後を追って、神田乃武が『ラセラス』を講読する。また、川戸道昭 (1994) によると、明治17年に東京大学出版から英語テキストの1冊として『ラセラス』が出た。ここで当時日本人初の教授であった外山正一が果たした役割は大きいという。さらに、『ラセラス』は明治18年に東京同盟出版書肆から、明治19年には六合館から出版された。東京大学をはじめとする中央の大学や英語学校だけでなく、地方においても『ラセラス』は教科書として採用された。熊本大学では、明治23年の予科第二級の英語教科書として「ジョンソン氏ヒストリ・オブ・ラセラス、マコーレー氏フレデリック・グレート、スウキンソン氏

大文法書」があがっている。有斐閣書房が明治28年から29年にかけて翻刻したテキストは20冊ほどあるが、文学書としてはジョンソン『ラセラス』やアーヴィング『スケッチブック』やデフォー『ロビンソンクルーソー』などが含まれる。この時代に全国の学校において『ラセラス』が教科書として採用された。

これによって多くの明治英学生がジョンソンの作品に触れることになった。誰がこれを教科書として選んだか、および、その選定の意図などはよくわからない。採択の理由の一つは、原本としての英語の読みやすさとその長さであろう。『ラセラス』は多くの章に分かれ読みやすいだけでなく、短編小説といってもよいくらいの長さで、学生といえど読み切ることができただろう。ただし、筆者は次の点に注目したい。

『ラセラス』は、明治17年からほぼ15年間、きわめて微妙な時代に教科書として広範囲に利用された。この時代は、鹿鳴館に象徴される欧化主義に対する反省が高まった時代であり、日本精神が復活した時代である。ただし、前時代の儒教や漢学に全面的に戻ったわけではない。日本精神に軸足を置きながら、英語を学ぶというのである。その時代の要請にびたりあったのが『ラセラス』ではなかつただろうか。そこで語られることばは英語であるが、内容的には東洋の道徳心にも通ずるものがある。むしろ、道徳心はどの国においても共通だという認識を学生たちはこの読み物を通してもったかもしれない。しかし、このような認識は、『ラセラス』の作品それ自体から導かれたというよりも、むしろ『西国立志編』のなかのジョンソンのことばから抱く印象のほうが強いかもしれない。そもそも『ラセラス』は、空想に耽ったり、希望という幻想に追い回されたり、無暗に将来に期待を寄せる若者たちを念頭におき、彼らに対する「虚望」への戒めの書である。

英語教科書がでたら、その翻訳書や注釈書が生まれるのは道理である。

『ラセラス』が最初に日本語に翻訳されたのは明治19年である。柳田泉(2005b, p. 29)が「十九年に入ると、翻訳文学の数が俄然殖える」と語るほどであるから、特別な年である。また、森田思軒がこの世界に登場するのが翌年である。ここで、『ラセラス』の翻訳者がどのような人々であったかをみたい。

草野宜隆は、丈山居士と称し、明治19年に本邦初訳の『王子羅世拉斯伝記』を上梓した。この人物には、もう一つ重要な翻訳書がある。ベンサム『人權宣言弁妄』である。これは元老院から明治20年に刊行された。原本は Jeremy Bentham: *The National and Artificial Right to Property Contrasted* (1832) であろう。この著作からも見当がつくように、草野は法曹界の人物で、原敬など政界人とのつながりもあった。

上記翻訳の次に現れたのが『西洋学芸雑誌』(明治20年)に掲載された「ラセラスの伝」(訳者不記)であろう。物語は次の忠告(exhortation)で始まる。「凡そ人にして虚望を抱き妄想自ら楽しみ幼年の志願は歳月の経過するに随つて必ず成就し今日に本むる所は明日に至つて輒く満足すべきと期するものは須らく「アビシニア」王子の伝記に付て鑑むべし」次に現れる訳書は明治22年ころになる。

福井有は、守愚山人と名乗った。明治22年に『刺西良斯 上巻』を伊勢国津市の地で上木した。訳者は凡例において、固有名詞と冠詞の関係について長々と説明を加えている。このことから、この訳者は英語教師であったと推測される。

田村左衛氏(南洋)、雅号を峨洋逸人と称し、もともとは高知の士族であった。旧制富田中学校(現、三重県四日市高等学校)の初代校長を大正8年から13年まで務めた。田村には『新撰英文難句詳解』(明治39年)などがあることから、彼は英語教師であることがわかる。教科書として採用されていた『ラセラス』を、『亜微志尼亞ノ王子刺世拉斯伝』の書

名で明治23年に翻訳し出版した。

渡辺松茂は、明治23年に『亜比斯尼亞国王子刺世拉斯経歴史』を大阪の積善館から刊行した。彼には多くの著作がある。『ニューナショナル第五読本直訳』『英文典直訳』などである。渡辺は当時教科書として利用されていた英文テキストを数年のあいだに精力的に翻訳した。どうみても、大阪の英語教師である。

河田清彦（河田泰之助、雅号は駕洋、新姓は新井清彦）も英語教師のようで、『スケッチブック積義』など訳書や講義録が多数残っている。そのなかで、『斯因頓氏第三読本直訳講義』のはしがきにおいて、このような英語テキストの翻訳を行う趣意について「リーダーと云ひ読本と云ひその幼童の読むべきものと知らばなかなか軽んじ去るべきにあらず」と述べている。また、マコーレーの訳述である『具雷武伝積義』の自序においてこう述べる。「学生が原書を講究するの参考に供するにあれば先ず原文を直訳して之に意識を加へ尚解し難き所には注釈を施し参考書の参考書たるを背かざらむを期せり」

時代的にかなりあとになるが、明治38年に河野六助は『王子羅世拉斯伝』を世に送った。この人物は、アストンの著作の翻訳者および紹介者として知られ、『日本文学史』（明治41年）『日本新党論』（大正11年）を翻訳執筆した。他の著作からも、河野は国語国文学の教師ではなかったかと推測される。この人物についてはあとで再度触れる。

草野の翻訳が世に出たのは明治19年で、ほかはほぼ23年以降である。かなりの時間的差がある。草野は検事で英語教育界の人物ではない。おそらく学校で『ラセラス』を読み、この作品に対する純粹な気持ちから翻訳を手掛けたにちがいない。他の翻訳は、『ラセラス』が教科書として完全に定着して以降に英語教師が学生のために訳したものである。明治23年に出版された田村の翻訳本の凡例にはこう書かれている。「頃日

諸学校に於て此原著を教科に用ゆるもの多し而るに往々難句ありて意味の解し難き処少なからず」明治22年12月に刊行された福井有直訳本の自序に「諸学校ノ教科書ニモ用ユルト聞ク」とある。さらに、ジョンソンについても触れている。「十八世紀ノ「ジョンソン」氏ハ予ニ相応ナシタル年代ノ人ニシテ又此書ニ論ズル所ヲ以テ見ルニ予ト趣味甚ダ異ナラス此書ヤ思フニ随フテ書キ筆ニ任セテ捕マヘ所ノナキ理屈ヲ陳ベ立テタリ此レ甚ダ予ノ悦ブ所ニシテ遂ニ此書ヲ同好ノ士ニ頒タント思ヒ立チタルハ錢ノ欲シキ而巳ナラズ少シク所以ノアル事ナルヲ記シ異ハンヌ」これらのことばにもかかわらず、『ラセラス』を学ぶことの目的や意義について言及しているものがほとんどないのは不思議である。

総じて述べるならば、『ラセラス』の翻訳書が明治20年ころからいくつか刊行されたのは、その文学的価値というよりも、それが教科書として利用されていたので訳そうとしたということである。このことは、マッコレーの『クライブ伝』(Macaulay's *Essay on Lord Clive*) についても同じことがいえる。この書も教科書として利用されていたので、ちょうど同じころいくつかの翻訳書が登場した。ただし、明治30年代に入り、テキストとしては現代作家の英文に限るという考えが一般的になり、『ラセラス』も学校ではあまり読まれなくなったようである。

上記の点は、翻訳文学の歴史の裏返しでもあることを確認したい。柳田泉(2005b: 40)はこう解釈する。「丁度此の二十一年を境界として翻訳文学刊行の数は漸次減少するが、これは一つの単行本が少なくなった為めで、つまり新聞雑誌の発展によるものである。だが何としても皮相的欧化主義の熱が醒めかけて来て、西洋早学び式の杜撰な訳書に飽いた結果もある。既に新興文学は正に積極的建設の一步を踏み出しつゝ、あつたので、かゝる啓蒙的紹介、梗概的紹介の大多数が影を潜めて然るべき時が来てゐた。」柳田のいう「初期翻訳文学概説」は、この明治21年をもつ

て締め括られるということは、『ラセラス』の翻訳がそれまでの時代とは異なった意味合いをもっていたことを暗示する。

(注1) これ以降の論説において、引用される著者や作品の多くは泉谷寛(1992, 1999)に依拠するものである。

参考文献

- 泉谷 寛『健闘の文豪ジョンソン—明治期『ラセラス』の片影—』溪水社、1992。
- 泉谷 寛『『ラセラス』受容史の研究』溪水社、1999。
- 植手通有『日本近代思想の形成』岩波書店、1974。
- 川戸道昭「明治時代の英語副読本 (I)」『英学史研究』第27号(1994)、pp. 89-106。
- 川戸道昭「明治時代の英語副読本 (II)」『英学史研究』第30号(1997a)、pp. 73-91。
- 川戸道昭「明治時代のサミュエル・ジョンソン—『ラセラス』の流行とその背景—」『人文研紀要』(中央大学人文研)第11号(1997b)、pp. 1-31。
- 高橋俊昭「中邨秋香の『仮名読 改正西国立志編』」『英学史研究』第22号(1989)、pp. 91-101。
- 藤原 暹「日本における S. Smiles『自助論』受容の思想史的研究」(I, II, III) *Artes Liberales* (岩手大学人文社会科学部) No. 31 (1982), No. 32 (1983), No. 34 (1984)
- 三川智央「『西国立志編』はどのようにして明治初期の社会に広がったか」『人間社会環境研究』第17号(2009)、pp. 69-81。
- 森田思軒「翻訳の心得」『明治文学全集26 根岸派文学集』筑摩書房、1981、pp. 230-231。
- 柳田 泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社、1961。
- 柳田 泉『随筆 日本文学1』平凡社、2005a。
- 柳田 泉『随筆 日本文学2』平凡社、2005b。